

「必要の双方向性」

～生きていますか？～

I コリント 3 : 9-23

■ 神様の価値観と私達の価値観

神様の価値観と私達の価値観は違います。これがわかっていなければ大問題が起こります。ところが、当時のパリサイ人は自分の価値観を神様の価値観であるとしていました。これはパリサイ人だけではなく、私達にも言えることです。夫婦や家族、職場での人間関係の中で「あなたの考えは間違っていて、私の考えが合っている。」という思いが湧かないでしょうか？私達はどこかで「自分が正しい」と思っています。これが聖書の中で絶えず問題を起こしているのです。神様の価値観と人の価値観の違いです。ですから、神様の価値観ではない「人につく」という価値観が起こってきます。「私はあの人の考え方の方が好きだ。」「私はあの人についていく。」というものです。聖書と世の中の教典の違いは何でしょうか。聖書は単純に歴史を書いています。初めから終わりまで、書いてあったことや、人々が見たことや感じたことや思ったことがそのまま書かれています。この世界が創造されイエス・キリストが生まれ、十字架にかかり、復活して天に帰り、天に帰った後どうなったかの人々の感じ方がまたこの聖書の中に書いているわけです。ところが、その感じ方の中で正しいこととそうでないことが一貫して貫かれているわけです。聖書以外の教えはすべて教典と呼ばれるもので、誰かが「こう言った」というものなのです。これは知識であって、その知識に基づく知恵なのです。けれど、聖書はそうではありません。歴史なのです。聖書の時代も派閥が起こりました。コリントの教会もバラバラになりました。これは今の時代も続いています。「私達の教団はこうだ」「この聖書の教えが正しいんだ。」と「教え」に向いています。しかし、聖書は教えを伝えているのではありません。イエス・キリストの生き様を伝えているのです。教えと生き様は違います。私達がどう生きていこうとするかが聖書の中に書かれているわけです。しかし、人々はどう生きていくかを見るのではなく教えに目を向けていったのです。

■ あなたは神様が必要。神様もあなたが必要 II コリント 9 : 6-15

神様は私達を共依存関係で終わらせようとはしませんでした。神様は、神様が私達を必要としておられ、私達も神様を必要とする関係（リレーション）を人に与えようとしていました。ところが世の教えや宗教は絶えず一方通行です。だから大問題が起こるわけです。

■ 死を意識することは…

あるホスピスのお医者さんがクリスチャンの患者さんが最後の1ヶ月を本当に感謝して精いっぱい生きようとする姿を見たそうです。人生全体が感謝に向かいたいと願うので最期の1ヶ月が感謝で終わるのです。日野原先生もその生涯を閉じようとする時に皆に「ありがとう。」と伝えたそうです。本当に生きようとする人は死に向き合います。私達は必ず死を迎えます。ですから、死ぬということを意識して生きる人とそうでない人とは全く違う人生になります。死ぬということを意識するということは生きるということを意識しますから、自分が自分であろうとします。ところが意識しない人は誰かに依存しようとしてします。「考える」ということのない生き方となり、不安定です。私達の人生が支えられている状態だと種を蒔くことはできません。種が蒔けないと

いうことは収穫がないということです。

■ ① 支えると寄り添うは違う ～与えると受けると成長～

寄り添うこととはその人が自分で立って歩いていけるように助けることです。イスラエルの人々はタルムートというものを作り、神様は出エジプトの時から絶えず何をして下さったのかということを忘れないようにしました。その祭りの一つが仮庵の祭りです。この祭りの最後の夜、年老いたパリサイ人は自分の罪は赦されたといって神殿で踊ります。年に1回のこの時だけは普段は入れない女性・子どもも入ることができました。パリサイ人はイエス様を十字架にかけるチャンスを狙っていましたが祭りの最中にはできないので、踊りながら娼婦を探し、夜が明けてからイエス様を罠にかけるタイミングを狙って見つけた女性をイエス様の前に引きずり出し、律法をもって石打ちにしろと突きつけました。ここでもしイエス様が「石打ちをしてはならない。」と答えたら律法を破ったとして捕らえることができると考えたのです。けれど、さっきまで「罪が赦された」と踊っていた当のパリサイ人に対して「この中で罪のない者が石を投げなさい。」とイエス様はおっしゃいました。パリサイ人はその場から立ち去らざるを得ませんでした。イエス様は娼婦だけでなく、パリサイ人に対してもその罪を示されたのです。神様の緻密な計画です。また、イエス様はシロアムの池で盲人を癒されました。当時、盲人や腫れ物があったり病をおびている人々は汚れているとされ神殿に入ることができませんでした。仮庵の祭りではシロアムの池から水を汲んで神殿に植えてある柳の木にかけます。神様から離れると人は枯れるということが水が与えらると柳が生きるということで表されていました。盲人にとっては祭りに入れられない自分は人間としての価値がないと感じる時であり、とても苦しくて悲しい時です。イエス様はこの盲人の人間として排除された人生を直そうとしました。だから、すぐに癒すことはなさらず、地面に唾をして、その土を盲人の目に塗り、わざわざシロアムの池に足を運べるようにされたのです。神様の奇跡には必ず目的があります。

■ ② 高慢に注意！！

～赦しを受けられない罪！！～

パリサイ人は高慢という罪から抜け出せませんでした。聖書の中には赦しを受けることができない罪は高慢であると書いています。高慢なままでは悔い改めが起こらないからです。この高ぶりの証拠は「私が正しい」という価値観です。

■ ③ 人生にイエスという！人生がイエス と言う！～人生に柔和！人間的作戦は 駄目である！～

パリサイ人は自分に都合の悪いものは排除する生き方でした。イエス様の存在は都合が悪かったので。私達は排除ではなく向き合う生き方です。今ある状況や人間関係…神様の前で考えるのです。私達が本当の姿に戻るこそが人生の中心です。愛とみことばに根差し、神様の人生と一緒に生きることが求めて選びましょう。そしてイエス様のように受ける人から与える人になっていきましょう。

(要約者:全本 みどり)

(8月20日)